

Back Number

本論文は

世界経済評論 2024 年 5/6 月号

(2024 年 5 月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%
送料無料
OFF



富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

定期購読
期間中

デジタル版バックナンバー読み放題!!



世界経済評論 定期購読



0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp

雑誌のオンライン販売

カワウソ、ラッコ、ラックスマン



佐藤 紘彰

この晦日正月には親友 John Gillespie 君が「^{だっ}瀬祭^{さい}」を持ってくる。たまたま、Selçuk Esenbel さんがマンハッタンにいと連絡があったので来てもらい、寿司と酒の夕になった。このトルコの日本歴史学者は1970年代の初めから知っている。

李商隠の自らの渾名

「瀬祭」は山口県産の酒。なぜこんな名をつけたのか。蔵元の地名^{おそこえ}瀬越は、「川上村に古い瀬がいて、子供を化かして当村まで追越してきた」という言い伝えによるという。しかし、こんな伝承ではおもしろくない。同じ動物でも「瀬祭」なら酒をのむのにいい。この言葉は「かわうそが捕らえた魚を岸に並べて、まるで祭をするようにみえるところから転じて詩や文をつくる時、多くの参考資料等をひろげちらすことをさす。また日本文学の革命児正岡子規が自らを瀬祭書屋主人と号している」と商標に説明がある。

子規やそれ以前の人たちには二十四節気や七十二候は今に比べると身近だったから、特に俳諧／俳句をひねる人たちには『礼記』にある「瀬祭魚」は季語としても親しかった。たとえば、芭蕉「瀬の祭見て来よ瀬田の奥」。

また、子規は武家の息子として初めから漢書に親しみ漢詩をさかんに書いた。とすれば、晩唐の李商隠（812～858）にまつわる話を知っていたにちがいない。宗の楊億（974～1020）の雑記「談苑」に、李商隠は文章を作る時に、「多く書冊を簡ひ閲し、左右に鱗次して、瀬祭魚と号し」たという一文がみえる、と高橋和巳注『李商隠』（岩波中国詩人選集15）にある。

ラクダのダニ

ところで、数年前、著作家 Verlyn Klinkenborg が、英国の出版社 Reaktion の出す Animal シリー

ズから当時すでに98冊でいたものから10冊を書評のかたちで扱ったことがある（The New York Review of

Books, “A Noah’s Ark of Books,” Dec 17, 2020）。動物は、猿、駱駝、鶏、犬、人間、水母、翡翠、鰐、烏賊、縞馬だが、この作家は書き方がうまい。たとえば、「わたしが最初に書評用に無料で送られたのは駱駝の本だったが、英国女性作家 Rose Macaulay の作品を推薦し、Al-Jahiz（アラブ世界古今最大の随筆家）から引用し、駱駝のダニが焚き火に投げ込まれた時の音を描く Robert Irwin のこの本を嫌うのは難しい」という。

そこで、ぼくは瀬 Otter を選んだ。そのころテレビなどでよく見かけていたからだだったが、著者は Daniel Allen。

本は、①序文、②民話、寓話、伝統、③商業的狩猟、④スポーツ狩猟、⑤文学、⑥映画、⑦保護の7章から成る。現在存続する otters は13種。中で、昨今日本で「かわいい！」と東南アジアから輸入されペットとして飼うが、ウンコなどの処理ですぐに嫌がって捨てると言われるのは Asian small-clawed otter（Aonyx cinereus）で、これは最小。体長は最大96センチ、重さ5キロ。

身長が一番大きいのは giant otter（Pteronura brasiliensis）。アマゾン流域中心に住みふつう雄は1.7メートル。2.4メートルの記録もある。そのため1960年代までコートのために狩猟の対象になった。ニホンカワウソを明治以後乱獲絶滅に追い込んだのは毛皮などをとるためだった。

体重最大、54キロのものも記録にあるのが sea otter（Enhydra lutra）。長さは1.5メートル。仰向きで泳ぎながら腹で雲丹を並べて食い、おなじく腹においた貝を手を持った石で割って食べ、子供を育てる。頭が白い。鮑などを海底からもぎ取

る場合なども石を使う。これがテレビなどではいちばん馴染みの otter かもしれない。

ラテン名「水に住む otter」の通り、この otter は陸上でも動くことはできるが、大半海上で過ごす。北太平洋岸に住み、それを可能にするのは「動物界ではいちばん分厚い毛皮」である。かつては推定 15 万から 30 万頭が生息していたが、1741 年に始まった毛皮を求めてこの otter の捕殺が始まり、これを止める国際協定が成立した 1911 年までには 1~2 千頭ほどまでに激減してしまった。

幸い、その後の保護で成功した動物の一つとして、現在 5.2 万頭まで増えた。

ラックスマン

sea otters の捕獲が始まったとされる 1741 年はナンだろうと調べると、この年はデンマーク生まれの Vitus Bering がロシアの地図製作者・探検者として、また海軍将校として、カムチャッカ遠征、大北方探検に従事、アラスカの南部を垣間見た年という。その帰りにアリューシャン群島などを記録したが、その海面に浮いて生きる sea otters を見たのだろう。ベーリング自身は同年末にロシアに戻る前に病死したが、同年ロシアは「国際貿易」のためこの動物を捕獲殺戮を始めたらしい。

ここで思い出した。『北槎聞略』(岩波文庫)である。この、18 世紀末の日本人のロシアの観察に sea otter すなわち海獺がでてくる。

天明 2 年 (1782 年) 12 月 13 日、伊勢の白子から大黒屋光太夫を船頭として合計 17 名、米 500 石などを載せて江戸に向かったが、駿河沖で暴風にあい漂流、それから寛政 4 年 (1792 年) 9 月ロシアから根室に連れてきてもらうまで、10 年間ロシアを彷徨うことになった。その間、漂人の 14 名が病死、根室に着いた 3 人の一人も病気で死んだ。残った二人のうち光太夫を中心に蘭学者桂川

甫周が聞き取って書いたのが『北槎聞略』である。光太夫の抜群の記憶力と甫周の博識で優れた報告となった。

ただ、漂流といい彷徨うといっても、ロシア人たちは日本人を丁寧に扱った。特に「イルコッカ」(イルクーツク)に至ったときに土地の人からは是非会うよう紹介された博物学者、化学者、探検家のキリロ・ケスタウウィッチ・ラックスマンは、光太夫らをペテルブルグまで同伴し、時の女帝エカテリーナの謁見を得た。オホーツクから根室までの船旅の責任を持ったのは、その息子アダム・ラックスマンである。後者は日本の歴史にも出てくる。

その光太夫らがまず流れ着いたのがアミシヤッカ(アムチトカ)島。ここで光太夫らは、ロシアの「官府へ商税を出し、海獺、海豹、海驢を島人どもにとらせ、煙草、木綿、皮船に造る牛馬の皮を以て貿易し」云々と観察した。この最初の「海獺」は今は海獺と書く。「らっこ」はアイヌ語という。

この島は長さ 68 キロ、幅は広いところで 6.4 キロのこの島はほぼ 200 年後には問題の多い一連の核実験で注目された無人島だが、当時は住民がいた。

光太夫らがムスクワ(モスクワ)に至って、巨賈の^{おおあきうど}ことを知る。「^{ありがね}見存金七十万、ムスクワ第一の豪富といふ。嶋々に甲幹を遣しむ。海獺、海豹、海驢、狐皮、豹皮、牙、角の類をとりあつめ都爾格の人と交易す」。

都爾格は後に「土耳其」と書くようになり、現在は「トルコ」。日本歴史家セルジユクさんが今度マンハッタンに来たのは、トルコ語に訳した山田寅次郎の『土耳其画観』(1911 年刊)を更に英訳したものの通販を、母校のコロンビア大学と相談するためだったという。

さとう ひろあき 翻訳家、コラムニスト在 NY